

日本大学工学部紀要

第 65 卷 第 2 号

令和 6 年 3 月

日本大学工学部
工学研究所

目 次

総合教育編

- 教師ストレスが体罰に及ぼす影響－モデル構築による「キレ」傾向の存在を中心として－
..... 齊藤 浩一・山田 朋生 (1)
- ミルトンにおける「キリストに倣いて」の概念と発展：『詩集』を中心に——その1
..... 野呂 有子・金子 千香・天海 希菜 (7)

総合教育編

教師ストレスが体罰に及ぼす影響

ー モデル構築による「キレ」傾向の存在を中心として ー

齊藤 浩一*・山田 朋生**

The effect of teachers' stress on corporal punishment: Focusing on the existence of "tight" tendency by model building.

Koichi SAITO* and Tomoki YAMADA**

Abstract

This study will identify the component elements of stressors and psychological stress reactions in teachers' stress through factor analysis, then show that they influence a particular psychological structure called losing temper of the teacher, and further show that this psychological characteristic has an impact on corporal punishment behavior. This paper makes recommendations for educational policy. A questionnaire survey of elementary and junior high school teachers was analyzed using a structural analysis of covariance. Results indicated that there is a causal relationship between corporal punishment and stress. In addition, the existence of a psychological structure called the "tendency to lose one's temper" was revealed. We propose the need to manage these factors. This paper is intended to contribute to teacher training and other programs to eliminate corporal punishment.

Key words: teachers' stress, losing one's temper tendency, covariance structure analysis

要 約

本研究は、教師のストレスにおけるストレスラー、心理的ストレス反応の各要素について、因子分析によって成分要素を明らかにする。その後、それらが教師のキレと呼ばれる特殊な心理構造に影響を及ぼすことを示す。さらに、その心理的特性が体罰行為に影響を持つことを明らかにし、教育政策上の提言を行うものである。小・中学校教師に関するアンケート調査を、共分散構造分析により解析した。結果として、体罰とストレスに因果関係があることが示された。また、「キレ傾向」と呼ぶ心理構造の存在が明らかになった。これらをマネジメントしていく必要性を提言する。体罰を失くす教員研修等への貢献を意図するものである。

キーワード：教師ストレス、キレ傾向、共分散構造分析

1. 問 題

「体罰」は、教育さらには教師への信頼を傷付ける行為といえよう。教師と子どもの関係は、信頼や尊敬を基盤とすることが望まれる。その場における「体罰」の存在は、この基盤を傷つけ、損なわせる行為といえ、根絶が望まれる我が国の教育課題といえる。事実、学校教育法第11条には、根絶すべき課題として記されている。

ここでの「体罰」とは、懲戒の内容が身体的性質のものである場合を意味する（最上, 1996）。しかるに、「日本の体罰の実態」を示したものには、大阪市立桜宮高等学校男子生徒体罰死事件等、悲劇的な事件が多い（竹田, 2014）。そのため、下に示すように、教師の体罰行為を厳しく糾弾した論考がみられる。

「体罰をする教師の目的は教育ですか？それともストレ

ス発散ですか？」というウェブサイトの質問に対し、ベストアンサーに選ばれた回答は、「[スポーツ指導（生徒指導ではありません）]という主張において、わたしは「指導者が振るう暴力は、指導の一環などではなく、ただカッとになって殴っているだけ」と判断しています。以下のように、指導者から受ける暴力を、DVと同じであると判断すると、全ての出来事につじつまが合ってくるように思うからです。

【加害者の心理】

今まで、わたし達の中には根底に、「指導者が振るう暴力は指導の一環だろう」という思い込みがありましたが、このような痛ましい事件を聞く度に、「指導の一環」でこんな事件が起きるとは到底思えなくなっているのも事実です。そして今思っているのは、指導者が振るう暴力は、「指導の一環」などではなく、「自分の怒りが抑えきれず、ただカッとになって暴行に及んでいるだけではないだろうか。」ということです。昔からよく「今日、先生機嫌悪いぞ！」などと友人らと話したことがあったと思いますが、それは戦術ではなく感情で殴っているあかしだといえます。これ

はもう、DV（ドメスティック・バイオレンス）の加害者の心理と同じです。「スポーツ指導（生徒指導ではありません）」において、普段どんなに熱心な指導をされていても、殴る瞬間の感情・殴ると決めた判断は、DVそのものです。よって暴力の争点「指導内容の是非」ではないと思っています。

「指導の一環だった。子供達のためにやった。行き過ぎた指導だった」という加害者側の主張と、「指導内容が適切だったか・理にかなったものだったか」という検証側のやり取りでは、いつまでたってもこのような事件を防ぐことはできないと思います。なぜなら、DV加害者と同じで、ただカッとなって手が出てしまうだけで、本当は殴るのに、たいした理由などないのだから。

ただカッとなり殴っているだけなので、「愛があれば殴ってもいい」・「信頼関係ができていれば殴ってもいい」・「殴った数」・「殴った強さ」・「殴った場所」といったことは、殴ってしまった行為を、後から正当化するだけのものにしか過ぎないと思っています。これもDV加害者の言い訳と同じです。」（ヤフー知恵袋2018, 2）

以上の論点は、体罰が生徒の人権を無視した教師のストレスの発露とするドメスティックバイオレンスと見る見方である。

これまでの体罰に関する研究を概観すると（近藤, 2017）、ほとんどが「受けた者」「見た者（体験または理論）」のものであり、行う人の心理的メカニズムに関するものが重要であるにも係わらず、調査等は行われていないと指摘できる。さらに、その生起メカニズムをストレスと関連づけた研究は、まったく見受けられない。

したがって本稿は、教師への質問紙調査によって、教師の「カッとなり自分を失った状態」を「指導のキレ傾向」と呼び、定義する。さらに、それは体罰と因果関係があるという仮説を実証し、ストレスマネジメントの視点から「体罰」を抑制する、教育政策上のあり方を提言するものである。これは、教師自身が体罰を抑制する手法を身につける提言であり、学校における生徒指導やスポーツ指導にとって意味が大きいと判断される。

教師のストレスを改善する意味は、第一に、休職の原因ともなる教師の健康状態の改善である。第二としては、ストレスを軽減し、教師の意欲を喚起し、子どもとの関係を中心とする教職の質を高めることが考えられる（Kyriacou & Sutcliffe, 1987）。心理的に余裕のある教師とそうでない教師が、生徒の問題行動と接する場面で、まったく違った態度をとることは容易に想像できよう。その1つには、冷静にかつ受容的に接することが考えられる。2つには、教師が精神的に追い詰められ、カッとなり、自分を見失う状態で指導する場合を「指導のキレ傾向」と定義し、体罰を行ってしまう場合である。そして、それはストレスに起因されることが予想される。

以上が本稿で検証される基盤となる仮説である。

ストレスについては、教師の健康ばかりでなく、子どもの心にも影響を及ぼし、人間関係を悪化させる可能性がある

る。上のKyriacouらによれば、教師ストレスとは「教師の仕事上で起こりうる自身の不愉快な情動（例えば緊張、欲求不満、憤り、怒り、抑うつ等）」である。本研究においては、ストレスを個人と環境の係わりの問題と捉え、この際の環境とは個人を取り巻く状況であり、外部と個人内を問わない。さらにその結果起こる怒りや不安等の情動を心理的ストレス反応と捉える（Lazarus & Folkman, 1984）。

教師のストレスについて、KyriacouとSutcliffe（1978）、Dunham（1980）、Fimian（1984）等による研究がある。地域や人種の違いによる研究（Payne & Furnham, 1987; Okebukora & Jegede, 1989）。1991年には、教師のストレス尺度を構築したモデルが作成されている（Borg & Riding）。さらに、Boyle et al（1995）やわが国の研究の例としては、兵藤（1992）や山本ら（1995）、油布（1995）が行った調査がわずかにあるのみであり、ほとんど行われていないといっても過言ではない。さらに、対生徒の問題とストレス反応との関係において、中学校教師のストレスについて尺度化した研究には、齊藤（1999）らが見受けられる。

現在教師は非常に受難の時代と言える。同じ学校の教師間の人間関係「同僚関係」についても、自動車通勤が急増し、意見の異なる教師が、酒席の場でコミュニケーションをとり、意見を戦わせながら、同意を得たり、信頼関係を深めたりといったことがなくなった。

さらに、教師のもっとも大切な子どもとの関係においても、「子どもが可愛く思えない」「何を考えているか分からない」等、「対子ども問題」と命名できる（齊藤, 1999）因子が提示されている。

おそらく上に挙げたストレスは、わが国の教育共通に見られる文化であり、どの地域でも大なり小なり見られるものではないだろうか。ストレスが大きい場合に、それにとまってストレス反応が大きくなると考えられる。そして、カッとなる精神状態で体罰が行われているとしたら、教師が置かれた状態から検証し提言するものが必要となる。以上を本稿の目的とする。

2. 方 法

1. 調査方法

関東圏内の中学校教師を対象とし、2010年の1月～2月に、約20名の所属学校が異なる教師に、「教育上の問題」について無記名方式のアンケートを依頼し、実施した。それをもとに、ストレス、ストレス反応、指導のキレ傾向等について、155名の教師に対してアンケート調査を実施した。

2. 調査材料

フェイスシート：フェイスシートには、性別、小・中学校の学校別の記名を求めた。

ストレス項目：小・中学校教師20名を対象とした教

員研修において、「教師生活の問題」というテーマについて、行ったブレインストーミング (Osborn, 1963) を2度行った。つぎに、とったそれらの内容の各自のメモを「教師生活の問題と意識の現状」というテーマでレポートを作成し、提出してもらう。それをもとに筆者により教師生活の問題は精選され、上記のストレス研究を参考に、さらに表現および内容の客観性を確保するために、対生徒との問題、同僚関係、管理職、教員生活、家庭、教育界、その他、15項目を、大学院生4名と現職の教員3名によって、小・中学校の教師のストレスとして適切な表現かを検討してもらい、最終的に9項目が採用されたものである。

心理的ストレス反応項目：最終的に使用した「怒り」5項目、「抑うつ」5項目、「不安」4項目は、齊藤 (1999) による中学校教師の心理社会的ストレス尺度の開発における心理的ストレス反応尺度を参考に、心理学専攻の大学院生4名と現職の教員3名によって、それらの項目を、教師にとって簡潔に判断される表現方法に改定されたものである。

さらに、教師がカッとなる状態つまり「指導のキレ傾向」は、上記の操作と同等にブレインストーミングを行い、その結果をもとに項目を選択した4項目である。体罰に関しては、シンプルに「体罰をしてしまった」に絞られる。

3. 結果および考察

1. 対象者の学校別、性別間によるクロス表

調査紙は、172名の教師から回答を得たが、1項目でも記入もれがあった者を除き、155名が分析の対象となった。

Table 1 小・中学校教師の調査対象者数と性別のクロス表

学校別	性別		合計
	男性	女性	
中学校	35	63	98
小学校	31	26	57
合計	66	89	155

2. 中学校教師のストレスを構成する因子

小・中学校教師のストレスは、どのような構造を持っているのかを検討するため、155名分の上記項目の得点のデータに主因子法により因子負荷量を求め、それをプロマックス回転させたものである。

小・中学校教師のストレスについて、固有値が1.0以上であり解釈が可能な2因子解が抽出された (Table 2)。第一因子は、「私の強い同僚がいる」「職員室に何でも言える雰囲気がない」「他の教師が自分を理解、信頼せず、陰で批判、悪口を言っている」等の意味から「対同僚」と命名された。

第二因子は、「生徒をかわいと思えない」「冷めた見方」「接することがわずらわしい」「悪いところばかりが目につく」等の子どもに対してのものであり、「対子ども」と命名された。

Table 2 教師のストレスについての因子パターン行列 (主因子法・プロマックス回転)

対同僚 ($\alpha = .74$)	1	2	
私の強い同僚がいる	.721	-.013	
教員に口も利きたくない人がいる	.710	-.044	
同僚とじっくりしない	.657	-.092	
他の教師が理解していると思えない	.502	.157	
対子ども ($\alpha = .70$)			
子どもの悪いところばかり目につく	.021	.743	
子どもに話を聞かせるのにエネルギーがいる	.020	.582	
子どもが何を考えているか分からない	.100	.558	
子どもに冷めた見方をしてしまう	-.109	.488	
子どもを可愛いと思えない	-.043	.426	
因子寄与率 (回転前)%	35.5	15.0	計 50.5%

小・中学校教師の心理的ストレス反応について、3つの項目「怒り」「抑うつ」「不安」それぞれがどのような構造を持っているのかを検討するため、155名分の上記項目の得点のデータに主成分分析を行い、確認すると、それぞれ1因子構造である。

上記2つのストレス因子は、いずれも α 係数が.70を超えており、等質性が十分と判断され、共分散構造分析の観測係数となった。

心理的ストレス反応項目は、齊藤 (1999) の研究をもとに構成したものであるが、心理的ストレス反応自体が対象、環境等によって変化する可能性を持っており、因子分析を行い尺度化される。「怒り」5項目、「抑うつ」5項目、「不安」4項目から成り立っている (Table 3, 4, 5)。いずれも確保できた α 係数は、0.90, 84, 70と等質性と整合性とも十分である。よって、平均値が共分散構造分析の観測係数となった。

Table 3 小・中学校教師の「怒り」に関する成分行列 (主成分分析)

($\alpha = .86$)	
怒りを感じる	.887
いらいらする	.814
感情の起伏が激しい	.781
不愉快な気分だ	.767
ムカムカする	.752
成分寄与率	64.2%

Table 4 小・中学校教師の「抑うつ」に関する成分行列 (主成分分析)

($\alpha = .84$)	
心が暗い	.844
気分が落ち込む	.824
さみしい	.774
がっかりする	.751
悲しい	.719
成分寄与率	61.5%

Table 5 小・中学校教師の「不安」に関する成分行列 (主成分分析)

(α=.70)	
89 気持ちが緊張している	.837
71 不安である	.748
82 気持ちが落ちつかない	.747
76 びくびくしている	.688
成分寄与率	57.3%

小・中学校教師の指導のキレ傾向項目についての主成分行列は、固有値が1.0以上であり解釈が可能な1つのみである (Table 6)。これも α 係数が.70を超えており、等質性と整合性が十分と判断され、共分散構造分析の観測係数となった。

Table 6 教師のキレ傾向に関する主成分行列 (主成分分析)

(α=.74)	
自分で自分が抑えられない	.844
ムキになってしまう	.749
キレて子どもに接してしまった	.713
感情的に子どもをしかってしまった	.708
成分寄与率	57.0%

Table 7 教師の体罰に関する統計量

	全くない	少しある	かなりある	とてもある	計
体罰を行ってしまった (%)	33.5	61.3	3.9	1.3	100

3. 小・中学校教師のストレスと指導のキレ傾向と体罰構造の解明

今回、教師のストレスと指導のキレ傾向と体罰の構造を解明するために、それぞれの項目を精査し、各因子が構成される。そのためには、各因子が潜在変数を設定され、まとめられる。そして、その関係について仮説が構成される。本稿での目的は、ストレスを構成するストレスと心理的ストレス反応に分け、それらが教師の日常の混乱の1つと考えられる「指導のキレ構造」を生み出し、「体罰」の原因となるという仮説を証明することである。

ここで用いる共分散構造分析 (SEM, 以下、共分散構造分析) は、従来のいわゆる因子分析が探索的因子分析と呼ばれるのに対して、検証的因子分析と呼ばれる。つまり、この研究において設定したモデル (Fig. 1) は、図中の下に示したGFI (Goodness of Fit Index), AGFI (Adjusted Goodness of Fit Index) (一応の基準として、0.9以上が適合、信頼性あり), RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation) (一応の基準として、0.05以下が適合、信頼性あり) が明らかにできる。以上から、この分析手法は、多変量解析の手法群のうちで、最新の線型モデルといえよう。よって、本稿においても、線型モデルであるFig. 1の構築を通して、小・中学校教師のストレスと指導のキレ傾向、さらに体罰との因果関係構造の解明を目指したのであ

る。

共分散構造分析において用いる観測変数 (observed variables) は、小・中学校教師 (155名) に対して、「ストレスサー」が「ストレス反応」、「指導のキレ傾向」「体罰」に因果関係なモデルの適合性を吟味するパス解析を行うために、各因子の平均合計得点が算出される。各因子のそれらを命名したものが、Fig. 1にある。

まず、ストレスサーにおいて2つの因子と心理的ストレス反応3成分、指導のキレ傾向、体罰を観測変数とし、それぞれ4つの構成概念とし、非逐次のモデルが作成される。このモデルの適合度は、GFI (Goodness of Fit Index) - 0.956, AGFI (Adjusted Goodness of Fit Index) - 0.926と、いずれも高い値を示している。さらに、RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation) は0.042と十分に有意な値である。したがって、モデルが標本共分散モデルを十分に説明しているといえる。

以上より、本研究の第一の目的である、ストレスサーがストレス反応を高め、指導のキレ傾向と体罰に因果関係を持つという仮説は実証されたといえよう。

なお、性別と学校別がこの図において、有意である。体罰に影響する性別の相違は、男性教師に多い。さらに小学校より中学校の男性教師に多く、対子どものストレスサーへの影響が高いことを著している。以上より、「体罰とストレス」に関する研修を企画するのであれば、小学校よりも中学校、女性よりも男性教師を優先することが得策と提示できよう。

4. おわりに

以上、本研究により、「ストレスサーが大きい場合に、それにとまって心理的ストレス反応が大きくなる。そして、カットなるといふ指導のキレ傾向によって体罰が行われる。」という因果関係の仮説が実証された。よって、各ストレスサーの存在から対策のあり方を模索する。

第一にいえることは、「心理的ストレス反応」や「キレ傾向」に影響を及ぼすのは、「対子ども」のストレスサーである。子どもがいない学校は、通信教育に見られるほどである。その負荷を減らすことを考えねばなるまい。教師は、対子どもとの多々のストレスの中で、怒りや不安や抑うつにまみれ、キレてしまうような状態で、体罰も行われると考えられると、忙しさを解消することが必要である。

さらに、体罰によって傷つく子どもの心理、肉体を考えると、対子どもの問題をもとに全てを是とすることはできない。しっかりと自身の置かれている状況と心理的ストレス反応、さらにキレた心理状態を認知し、それに、教師は責任を持たねばならない。いかような状態にあらうとも、肉体的にも、心理的にも他者を傷つける行為は赦されない。

では、どのように、体罰が行われる状態を減少するか。第二にいえることは、対同僚のストレスサーの存在を視野に入れ、同僚間のサポートが得られ、よりゆとりのある学校の在り方を模索するマネジメントが必要となる。教師

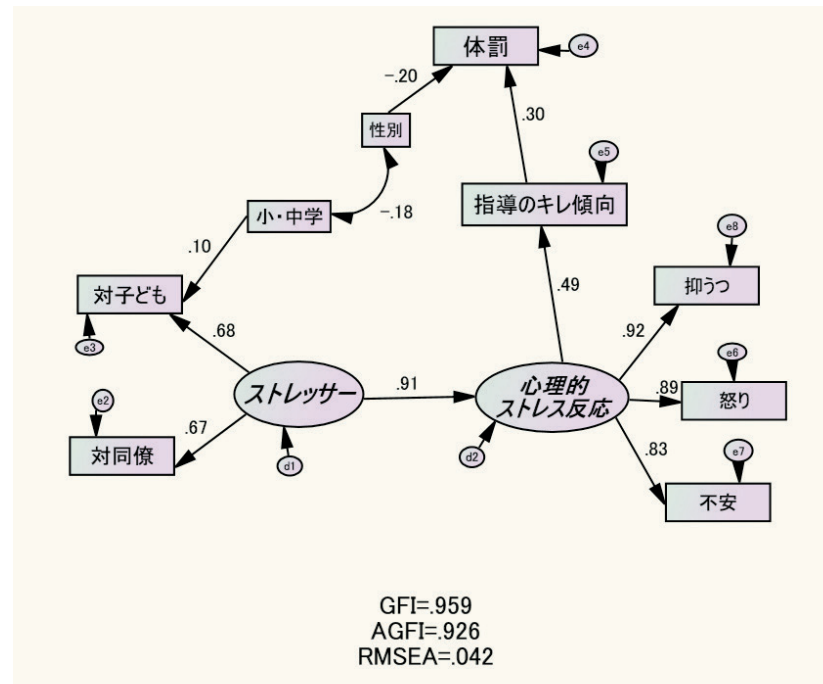


Fig. 1 教師ストレスが指導のキレ傾向，体罰に及ぼす影響

の多忙は、マスコミ等で話題になっている。それに教員間で格差があり、ストレス者になっている。体罰解消もその視野の中で論じられることが望まれる。

今、対教師のストレスは、教師評価のあり方にも関係が考えられる。成果主義の中で教師の仕事の評価する動きが高まり、実際ある仕事を任せられる教師とそうでない教師の存在が現れる。そこで、事務処理能力や人柄、責任感等で仕事の負荷にばらつきが生まれる。それならば、教師の勤務評価は自己自身の申請書を提出し、それを評価するシステムでなければ教師自身のより高い成長は望めないのではないか。さらに、より学校現場に「余裕またはゆとり」を増やすために、教師の仕事を点検し、これから教師を志す学生によって部活動等の補助や事務処理を簡素化していくことが必要であろう。

第三に、ストレス者とストレス反応の間に認知システムが挙げられる (Lazarus, 1978) ことに関係する。その過程を認知するストレスの対処方法として、問題解決と情動の調節が挙げられる。ここに、ストレスと体罰を視野にいたした研修のあり方が提示される。

よって、それらの解消はどれか1点のみに着目するのではなく、ストレスと体罰を経過的 (メタ認知的) に、教師自身が認知するアプローチを取らねばならない。つまり、教師がストレス的環境にいることを自覚し、ストレス者と心理的ストレスの存在を認知し、自身の行動までも修正する知識と研修が必要ではないか。

ならば、余裕のある教師生活の中で、良好な同僚関係を有し、生徒に好意的な気持ちと態度を持って接する教師像が模索されねばならない。そのために、教師対象とするストレスマネジメントを主題にした研修も考案されよう。特に、その研修は、小学校よりも中学校を、女性教師より

も男性教師を優先することが、Fig. 1 にて示されている。

最後に、現在の教育状況についてのさらなる洞察を含む研究が必要であるといえまいか。例えば、心理的ストレス反応は、本研究ではとりあげなかったが、「恐怖」や「妬み」も考慮せねばならない。ストレス者もまだ隠れたものがあるかもしれない。

参考文献

- 1) Boyle, G. J., Borg, M. J., Falzon, J. M., & Baglioni, A. J., Jr. (1995). A structural model of the dimension of teacher stress. *British Journal of Educational Psychology*, 65, 49-67.
- 2) Borg, M. G. & Riding, R. J. (1991). Towards a model for the determinants of occupational stress among schoolteachers. *European Journal of Psychology of Education*, IV(4), 355-373.
- 3) Dunham, J. (1980). An Exploratory Comparative Study of Staff Stress in English and German Comprehensive Schools. *Educational Review*, 32, 11-20.
- 4) Fimian, M. (1984). The development of an instrument to measure occupational stress in teachers: The Teacher Stress Inventory. *Journal of Occupational Psychology*, 57, 277-293.
- 5) 兵藤啓子 (1992). 小学校教師のストレスとカウンセリング カウンセリング研究, 25, 72-84.
- 6) 近藤龍彰 (2017). 体罰研究の近年の動向と今後の課題 富山大学人間発達科学実践総合センター紀要, 教育実践研究, 12, 1-6.
- 7) Kyriacou, C. & Sutcliffe, J. (1978). Teacher Stress: Prevalence, Sources, and Symptoms. *British Journal of Educational Psychology*, 48, 159-167.
- 8) Kyriacou, C. & Sutcliffe, J. (1987). Teacher Stress and burnout: An international review. *Educational Research*,

- 29, 146-152.
- 9) Lazarus, R. S. (1978). The Stress and Coping Paradigm, Paper presented at the conference on the critical evaluation of behavioral paradigms for psychiatric science, University of Washington.
 - 10) Lazarus, R. S. & Folkman, S. (1984). *Stress, Appraisal, and Coping*, New York. Springer (本明寛・春木豊・織田正美(監訳) (1991), ストレスの心理学, 実務教育出版).
 - 11) 最上嘉子(1996)教育心理学と実践活動, 学校現場における体罰をめぐって 教育心理学年報, 36, 147-156.
 - 12) Okebukora, P. A. & Jegede, O. J. (1989). Determinants of Occupational Stress among Teachers in Nigeria. *Educational Studies*, 15, 23-36.
 - 13) Osborn, A. (1963). *Applied imagination: Principles and procedure of creative problem solving* (3rd ed.). New York. Charles Scribner's Sons.
 - 14) Payne, M. A. & Furnham, A. (1987). Dimensions of Occupational Stress in West Indian Secondary School Teachers. *British Journal of Educational Psychology*, 57, 141-150.
 - 15) 齊藤浩一(1999). 中学校教師の心理社会的ストレス尺度の開発 カウンセリング研究, 32, 254-263.
 - 16) 竹田敏彦(2014). 学校教育法第14条但書(体罰の禁止)に関する研究(I)-教育倫理的アプローチによって- 広島国際大学教職教室教育論叢, 6, 3-18.
 - 17) ヤフー知恵袋(2018, 2). 「体罰をする教師の目的は教育ですか? それともストレス発散ですか?」. ヤフー知恵袋. https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q14100423949, (参照2024-02-25).
 - 18) 山本奨・杉江征・山際勇一郎・勝倉孝治(1995). 小, 中学校教員のストレスに関する研究 日本教育心理学会第37回総会発表論文集, 550.
 - 19) 油布佐和子(1995). 教師の多忙化に関する一考察 福岡教育大学紀要, 44, 197-210.

ミルトンにおける「キリストに倣いて」の概念と発展： 『詩集』を中心に——その1¹⁾

野呂 有子*・金子 千香**・天海 希菜***

Milton's Concept of *Imitatio Christi*: From *Poems* 1645 to *Poems* 1673 (Part 1)

Yuko Kanakubo NORO*, Chika KANEKO** and Kina AMAGAI***

Abstract

In 1646, John Milton published *The Poems of Mr. John Milton, Both English and Latin, Compos'd at several times*, and in 1673, revisioning and reediting the former edition, he published *Poems, &c. upon Several Occasions. By Mr. John Milton: Both English and Latin, &c. Composed at several times. With a Small Tractate of Education to Mr. Hartlib*. Our monograph focuses on how the author presents his concepts of “*Imitatio Christi*”/ “*Imitating Christ*” and how he reorganizes this concept in each poem of the two editions and as a whole work. In the first part the concepts in general in Milton's day are epitomized, in the following parts selected poems are concretely analyzed, and in the last part, sequences and groups of poems are investigated in terms of Milton's heroism interwoven with his image of Christ, the Son of God, and his concepts of “*Imitatio Christi*”.

Key words: John Milton, Heroism, Imitating of Christ Dual Heroism, Female Hero

要 約

本論考ではジョン・ミルトンの『詩集』(*Poems*)収録の小詩作品から数篇を取り上げ、「キリストに倣いて」(*Imitatio Christi* / *Imitating Christ*)という概念を視座に、ミルトンの英雄観を明らかにする。詩人が青年期から関心を寄せつづけた英雄的資質が折々にいかに表現され、いかに発展していくのかを跡付けていく。まずミルトンの時代における「キリストに倣いて」の概念を簡約し、第1章からは小詩作品における「キリストに倣いて」の具体例を考察する。また第3章では、複数の詩作品のまとめ、さらに詩作品全体の配列から俯瞰されるミルトンの創作意図について「キリストに倣いて」の観点と絡めて考察する。

キーワード：ジョン・ミルトン、英雄観、キリストに倣いて、英雄像の二層構造 (dual heroism)、女性英雄 (female hero)

はじめに

本論考ではジョン・ミルトン (John Milton, 1608-74) の小詩作品からイタリア語ソネット二篇、ラテン語エレゲイア四篇、ラテン語「改詠詩」、そして英語頌詩一篇に焦点をあてながら、「キリストに倣いて」(*Imitatio Christi* / *Imitating Christ*)の概念を基軸として、彼の英雄観の萌芽と発展について考察する。若き詩人が「最も完璧な英雄」 (“Most perfect heroe”; *The Passion*, 13) とみなすキリストとその教えを模範としながら、自覚的成長を遂げていく姿を跡付けていく。²⁾

そのためミルトンの各作品を一つの総合テキストとして扱い、構造的な読解に基づき分析する。段階的な発展をたどる際に、作品相互の配列が極めて重要だとわれわれは考えている。ミルトンは詩作品の配列に創意工夫を凝らしており、『詩集』収録の諸作品の配列 (=ミルトンの意図する作品の公開順) は執筆年とは異なっている。³⁾ 執筆時

期には諸説あるが、⁴⁾ われわれの作品分析・解釈方法は、一貫して、作者にして編集者たるミルトンの言説と配列方式に従うものであることをここに明言しておく。われわれは、表層に認められる詩作品の個別主題の奥に、『詩集』全体を貫いて流れる「キリストに倣いて」という概念に注目する。

本概念を広く伝えるトマス・ア・ケンピス (Thomas à Kempis) 著『キリストに倣うことについて』(*De Imitatio Christi*, c. 1420-27) は聖書に次いで最もよく読まれたキリスト信仰の指南書として知られ、カトリックにもプロテスタントにも宗派を問わず受け入れられた。しかしその解釈、受容、実践方法は宗派や立場により異なっていた。⁵⁾ J. Sears McGeeによれば、英国においては、この差異がアングリカン教会とピューリタン、王党派と議会派の対立を生み出し、革命へと繋がる火種の一つとなったという。⁶⁾ ピューリタン側は原罪を犯した人間と無罪にもかわりなく人間の罪を贖ったキリストは対極の存在であるから、「キリストに倣いて」の実践は容易く成し遂げられるものではないと考えた。そして、神からの働きかけと悔い改めを第一義として、常に誘惑に陥らないよう理性を働かせて自身を律する必要があるとした。一方、アングリ

令和5年11月30日受理

*元日本大学文理学部英文学科教授・学術博士

**日本大学工学部総合教育専任講師

***日本大学文理学部英文学科助手

カン側は、ピューリタンがキリストに倣う困難さを強調することによって人々を信仰から遠ざけ、しいては国家と教会を転覆させようとする反逆の意図を持っていたとして、ピューリタンを危険視した。本概念は時代の様相を色濃く映し、革命のただ中を生きたミルトンの作品を理解するうえでも看過しえないと考えられる。

Nandra Perryは*Imitatio Christi: The Poetics of Piety in Early Modern England* (U Notre Dame P, 2014)において、16世紀の英国宗教革命から17世紀の王政復古に至るまでの「キリストに倣いて」の受容の多様性と変遷を文学的視点から考察するが、この研究のクライマックスにミルトンとその作品が位置づけられている。ミルトンは『教育論』(*Of Education*, 1644)において学習の目的は「神を愛し、神にならい、できうるかぎり神に近いものとなるための知識を得て、魂に真の美德を養なっ」(“... out of that knowledge to love him [God], to imitate him, to be like him, as we may the nearest by possessing our souls of true vertue”, *CM* 4, 277) とうえで、篤き信仰とともに「最高の完成」(“the highest perfection”, *Ibid.*)を目指すことであると説くが、その道は容易ではない(“nor arrive so clearly to the knowledge of God”, *Ibid.*)と述べている。⁷⁾ この点でミルトンは議会派、ピューリタンに極めて近い立場で「キリストに倣いて」の概念を理解していると言える。「最も完璧な英雄」の範例に倣い「最高の完成」を実現することはきわめて困難を要するからこそ、ミルトンはこの概念の実践者を、キリスト的資質を備えた人物=英雄として称え、自己成長の指針ともするのである。ミルトンの代表作『楽園の喪失』(*Paradise Lost*, 1667)における「み子が範例をもって教え授けたこと」(“Taught this by his [Christ's] example”; 12. 572)に倣い、荒野に歩を進める原初の女男イヴとアダム(Eve & Adam)の姿にはこの概念が顕著に表れている。⁸⁾ ここでキリストとキリストを範とする人間の関係は、完成された英雄を第一英雄と呼び、それに倣う未完成の英雄を第二英雄と呼ぶ、英雄像の二層構造(dual heroism)を用いて作中で提示される。⁹⁾

本論考第一章では、イタリア語ソネット群を取り上げ、英雄像の二層構造がイタリアの乙女(詩人・庭師)と青年ミルトン(詩人)との関係において適用され得ることを明らかにする。つまり志鷹英行、Christopher Bond、野呂有子による先行研究で明らかにされた第一男性英雄キリストと第二男性英雄アダムの関係性を示す「第一男性英雄(=キリスト)に倣いて」という構図、第一女性英雄サブライナ(Sabrina)と第二女性英雄レディ(the Lady)の間にみられる「第一女性英雄(=キリスト的資質を備えた精霊)に倣いて」という構図は、より早い時期に、第一英雄に女性、第二英雄に男性を据えた乙女と詩人の関係性、「第一女性英雄(=キリスト的資質を備えた詩人)に倣いて」を基に発展した可能性があることを主張するものである。ここで、志鷹、Bondにより男性英雄間の関係を表す際に用いられた概念は、その萌芽を探求する過程で、女性英雄間

の関係のみならず、女性・男性英雄間の関係をも表しうるということが証明される。性差にとらわれず、「キリスト的資質を備えた」女男が共に相互に高め合う関係性がミルトンの思想の根源にあることを認めざるをえない。野呂による女性英雄(female hero)論を新たな例を用いて立証するとともに、¹⁰⁾ ミルトンが英雄像の二層構造に基づき、自らの詩人としての成長を第二英雄として描出していることを示して結論とする。

第二章は、「キリスト(の模範/的資質)に倣いて」成長する詩人としての自己像を辿るものである。ここではラテン語エレゲイア連作詩群に特徴的に表される、愛の誘惑に陥りかける未成熟な詩人の姿を取り上げる。ミルトンは、キリスト教的徳目の一つである貞節に反する愛欲を退けることで第二英雄としての自己成長を示そうとする。

第三章では、ラテン語エレゲイア連作詩群の最終作品に位置づけられる「第七エレゲイア」(19歳の作)と「改詠詩」(38歳の作)を取り上げ、第一章および第二章で示される「第一英雄(キリスト)に倣いて成長する第二英雄」という視座から、本詩にまつわる執筆順と公開順の問題に対する新たな回答を提示する。これにより英雄像の二層構造が、単一の作品や特定の創作時期に限られないことが明らかになる。

上記を踏まえ、第三章は、ラテン語エレゲイアから英語頌詩へと読解を進めていく。幼子キリストを称える頌詩は、第二英雄であるミルトンが叙事詩人として立つという大志を表明し、成長の証として創作された。『詩集』全体を俯瞰して、相互に共鳴する主題やモチーフの連なり、ここではとくに「キリストに倣いて」の概念に注目することで、『詩集』の読者がラテン語エレゲイア連作から巻頭作品へと再び意識を連結し、将来のキリスト教叙事詩人が手がけた作品としてこれを再読することが期待されていることを確認する。このようにして『詩集』をミルトンが配列した順で読み進めることにより、個々の作品が単独で完結するのではなく、相互に呼応しあひながらより大きな作品を構成することが示される。そして『詩集』で多様に、繰り返し出現する英雄像の二層構造に親しんだ読者にとって、より抽象的になっていてさえも、『楽園の回復=闘技士サムソン』における第一英雄キリストと第二英雄サムソンとの間に再びこの構図が用いられていることは彰々たるものとなる。

以上のことから、「キリストに倣いて」の概念を視座に各作品を分析した結果、英雄像の二層構造の展開的適用の可能性が明証されるに至る。

第一章 イタリア語ソネット二篇：“the female hero”の萌芽

野呂有子は『楽園の喪失』におけるイヴが墮落後に成長を遂げ、英雄的資質を備えた女性として描かれていると指摘し、“the female hero”と呼んだ。¹¹⁾ これに関連して、本章では、ミルトンが青年期にイタリア語で創作した恋愛

風ソネットの「第二番」と「第三番」（共に1630年頃の創作か）に着目し、¹²⁾ 若きミルトンの恋愛観・女性観に認められる「キリストに倣いて」の萌芽について考察する。

『詩集』中、特定の女性を主題にした作品や恋愛詩は決して多くはない。中でも詩人自身の恋愛を歌った詩は「ソネット第二番」から「第六番」および「カンツォーネ」、そしてラテン語で書かれた「第七エレゲイア」（1628年頃）等がある。どちらもケンブリッジ大学在学中に創作されている。¹³⁾

イタリア語ソネットは共通して、一人の女性について描かれている。¹⁴⁾ 彼女の名がエミリア（Emilia）であることが「第二番」で示唆されている。彼女が実在の人物なのか、詩人の詩女神なのか、詳細は分からない。しかしその情報が当該ソネットから読み取れること、また「ソネット第四番」で盟友ディオダティ（Charles Diodati, 1609-38）へ呼びかけていることから、盟友と共通の知り合いだった可能性が高い。

Donna leggiadra il cui bel nome honora
L'herbosa val di Rheno, e il nobil varco,
Bene è colui d'ogni valore scarco
Qual tuo spirto gentil non innamora,
Che dolcemente mostra si di fuora
De sui atti soavi giamai parco,
E i don', che son d'amor saette ed arco.
La onde l'alta tua virtu s'infiora.
Quando tu vaga parli, o lieta canti
Che mover possa duro alpestre legno,
Guardi ciascun a gli occhi, ed a gli orecchi
L'entrata, chi di te si truova indegno ;
Gratia sola di su gli vaglia, inanti
Che'l disio amoroso al cuor s'invecchi.

可憐な貴婦人よ、その美しき名〔エミリア〕はその地に誉れを与える、

レノーの緑なす谷と、かの名高き〔ルビコンの〕浅瀬とに、

いかにも、彼はあらゆる良き資質を剥奪されているにちがいない、

あなたの高貴な精神から愛の靈感を受けぬような者は、

あなたの魂はかくも甘美なる姿を顕わに示し、

その優雅な立ち居振る舞いは決して物惜しみせず、
愛の弓から射かけられた賜物は

そこでこそ、その格調高き徳の花を咲かせるのだから。

あなたがかくも甘美に語り、陽気に歌うとき、

堅牢なアルプスの木々すらも揺るがすほどの力を持つ
つづのだから、

その目と耳への入り口に見張りを立てさせるがよからう、

あなたの愛を受ける資格なしと気づく者だれにもせよ、
ただ、天上から下賜される恩寵だけがその拠所となるように、

愛の欲求が彼のこころ深くに根をおろさぬうちに。

（野呂有子訳）

本ソネットではエミリアを褒め称え、彼女のキューピッドの矢のような視線と、オルペウスの琴のように、アルプスの堅い木々をも揺らしてしまう声は、男性たちを魅了すると歌われている。彼女の外見的な美しさに加え、「高貴な」（“spirto gentil”）や「格調高き徳」（“l'alta virtu”）などの内面的な魅力が歌われている。後にミルトンは『離婚の教義と規律』（*The Doctrine and Discipline of Divorce*, 1643）で「結婚の目的は、互いにふさわしい助け手との精神的融合、語らいであると主張した」と野呂は述べる。¹⁵⁾ 彼の理想を体現するのが『楽園の喪失』におけるイヴとアダムである。ミルトンはイヴに外面的美だけではなく、美德（“virtue”）と知性（“intellect”）を与えている。¹⁶⁾ 本詩においても、詩人がエミリアを“l'alta virtu”を持った人物として描いていることが明確である。また、野呂が“spirto gentil”を「高貴な精神」と訳し、John T. Shawcrossが“noble soul”と英訳していることから、¹⁷⁾ 彼女が単に「優しい」だけではなく、「教養のある」、「高潔な」精神の持ち主であることがわかる。さらに、1行目で彼女は「可憐な乙女」（“Donna leggiadra”）と呼ばれている。イタリア語の“leggiadra”には英語で“beautiful / charm”という意味の他に“graceful”や“elegant”という意味がある。ちなみに“grace”は『楽園の喪失』に出現し、墮落前のイヴを示すのに六度用いられている。¹⁸⁾ 特に初出は、神が人類の始祖アダムとイヴを創造した際にイヴを描出する語として出現する（“For contemplation he and valour formed, / For softness she and sweet attractive grace,”; *Paradise Lost* 4. 297-98）。そのため“grace”はイヴを象徴する語といっても過言ではない。このことから、「ソネット第二番」では、若きミルトンの情熱的な恋心が描かれているが、既にこの時点において若きミルトンが理想的女性に求めるのは美德と知性であり、その女性像が『ラドロー城の仮面劇』（*A Mask presented at Ludlow Castle*, 1634）の淑女、そして『楽園の喪失』の「女性英雄」（the female hero）イヴへと継承されていくと考えられる。

次に「ソネット第三番」を検討してみよう。

Qual in colle aspro, al imbrunir di sera
L'avezza giovinetta pastorella
Va bagnando l'herbetta strana e bella
Che mal si spande a disusata spera
Fuor di sua natia alma primavera,
Cosi amor meco insu la lingua suella
Desta il fior novo di strania favella,
Mentre io di te, vezzosamente altera,
Canto, dal mio buon popol non inteso

E'l bel Tamigi cangio col bel Arno.
 Amor lo volse, ed io a l'altrui peso
 Seppi ch' Amor cosa mai volse indarno.
 Deh ! foss' il mio cuor lento e'l duro seno
 A chi pianta dal ciel si buon terreno.

険しい岩山の上、^{たそがれ}黄昏が刻一刻と迫るとき、
 練達の羊飼いの乙女は、慣れ親しんだ土地で
 異国の可憐な若木に水をやる、
 その若木は〔普通なら〕めったに葉をおい繁らせた
 りはしない。
 慈しみ^{いつく}育む^{はぐく}故郷^{ふるさと}の春から遠く離れた異郷の地では。
 <愛>^{アムール}が私に^{うなが}説得す、わが俊敏なる舌にのせて、
 異国の言説^{ことば}で新たな花を咲かせよ、と
 慈悲深くも誇り高き貴婦人よ、私があなたに
 詩歌^{うた}を捧げるとき、わが国人の知らぬ調べに——
 麗し^{うるわ}のテムズの調べを麗し^{うるわ}のアルノーの調べに——
 転じて詠^{うた}え、と。
 <愛>^{アムール}がそれを望んだのだ、そして他の人びとの悲
 嘆^{かえり}を顧^{あや}みることなく、
 <愛>^{アムール}がただ徒勞^{いたずら}に望んだのではなかったと私は知っ
 ている。

ああ！ 遅鈍なるわがところが、いま、あなたが若
 木を育てるその地のように、
 かのお方^{かた}が天上から^ま蒔かれた種^{はぐく}を育む、良き地の土
 となるように、と願^{まご}ひ奉る。(野呂有子訳)

若きミルトンはイタリア語でソネットを創作する試みを、
 異国の植物を育てる女羊飼いの行為に「倣って」歌って
 いる。それは、英国内では理解されないが、異国の乙女を愛
 するが故の行為である。行頭の女羊飼いの姿は、エデンの
 園で植物の世話をするイヴ（とアダム）を想起させる。乙
 女はイヴ同様、植物に水やりをして慈しみ育てるのである
 (1-5)。さらに、野呂によれば、ルネッサンス期の英国
 では、羊の群れの神であるパンは、しばしイエス・キリス
 トと同一視された。¹⁹⁾

注目すべきは本ソネットの主要登場人物が「練達の
 羊飼いの乙女」(“L'avezza giovinetta pastorella”) だ
 という点だ。ミルトンの詩作品中、他に「女性羊飼い」
 (“shepherdess”) の語が出現するのは、「ウィンチェスター
 侯爵夫人の墓碑銘」(An Epitaph on the Marchioness of
 Winchester, 1631) の第63行だけである。この英詩は、産
 褥死した侯爵夫人への哀悼歌であり、夫人は同じく出産時
 に亡くなった女羊飼いらケル (Gen. 29.9) に「倣って」
 生き、そして死んだ女性として称えられている。²⁰⁾

しかし「羊飼いの乙女」は、ラケルやモーセの妻チッポ
 ラを指しているとは考えにくい。²¹⁾ なぜなら、羊飼いの
 乙女は「可憐な若木」(“herbetta”) を育てており、「庭師」
 の役割も担っている。²²⁾ さらに、「庭師」は「ヨハネ福音
 書」第20章15節の、マグダラのマリアに「庭師」と誤認さ
 れるイエス・キリストを想起させる。青年期の詩人は本ソ

ネット乙女をキリストのイメージで描くことによって、
 “the female hero” たる「羊飼いの乙女」(“pastorella”) を
 登場させたのである。更に、“pastorell” の語に「練達の」
 を意味する“avezza” の語が前置されている。ここからも、
 乙女が男性主人公を引き立たせる従来型の“heroine” では
 なく、自ら能動的に外界に働きかけ、自己研鑽と自己育成
 に励む「女性主人公」(female hero) であることが明らか
 となる。つまり「ソネット第二番」と「第三番」において
 も、女性たちは“the female hero” たるイヴの萌芽的姿形
 で描かれているのである。

第二章 ラテン語エレゲイア連作：叙事詩人の 自覚と決意

新井明は「ミルトンとしては、自らの生の謳歌の表現手
 段として母国語を用いることには、はばかれるものを感じ
 ていたものと考えられる。……しかしラテン語やイ
 タリア語で作品を書けば、……文芸上の巨匠たちの存在
 をうしろ楯として、……いいづらいこともいえるとい
 う雰囲気があった」と述べている。²³⁾ 若きミルトンの「生
 の謳歌」の典型例として、美しい乙女たちに対する詩人の
 憧れや恋心の吐露があげられよう。これらは『詩集』の「英
 詩部門」にはほとんど認められない詩人の心情である。ラ
 テン語詩三篇から例を挙げてみよう。

まず「第一エレゲイア」(Elegia prima, 1626) を取り
 上げる。ミルトンはケンブリッジ大学在学二年目の春に停
 学処分を受け、一時、ロンドンの実家に戻った。だが、こ
 こには若き詩人の反省や自責の念は認められない。むしろ
 学舎を離れたことで自由をえて、観劇に耽り、読書や詩作
 に勤しむ様子が楽し気に語られる。

Tempora nam licet hinc placidis dare libera Musis,

Et totum rapiunt me mea vita libri.

Excipit hinc fessum sinuosi pompa theatri,

Et vocat ad plausus garrula scena suos. (25-28)

なぜなら、わたくしは余暇の時間を高貴な^{ムーサイ}詩女神に捧
 げることが許されていますし、

それに、わが命——書物——が私を夢中にさせるか
 らです。

読書三昧のあとは、円形の劇場での催しが私を魅了し、
 台詞の飛び交う芝居が私に拍手を求めるのです。²⁴⁾

停学期間が「自由な時間」(“Tempora libera”) であり、「詩
 女神」(“Musis”) と共に過ごす日々は詩作のための特権的
 余暇と捉えられており、詩行全体に解放感が溢れている。

さらに、彼は「ブリテンの乙女たち」(“Virginibus
 Britannis”, 71) の姿に目を奪われる。

Ah quoties dignæ stupui miracula formæ

Quæ possit senium vel reparare Jovis;

Ah quoties vidi superantia lumina gemmas,
 Atque faces quotquot volvit uterque polus;
 Collaque bis vivi Pelopis quæ brachia vincant,
 Quæque fluit puro nectare tincta via,
 Et decus eximium frontis, tremulosque capillos,
 Aurea quæ fallax retia tendit Amor. (53-60)

ああ、わたくしは幾度、年老いたユピテルでさえ若返らせる神秘の姿に

茫然としたことか。

ああ、わたくしは幾度、宝石にも、

極点を周回する燃ゆる星群にも勝る瞳を、

生き返ったペロプスの象牙の腕よりも白きうなじを

目にしたことか

——その生きた肌の下には清きネクタルに染まった
 血潮が流れている。

そしてその比類なき優美な眉と揺れる巻き毛を。

その髪の前では、いたずら者の^{アモル}＜愛＞が、かの黄金
 の網を広げているのです。

上記引用の前半に二度出現する「ああ、幾度」(“Ah quoties”)のA音の響きは、最終詩行の“Aurea”と“Amor”に呼応して、絡めとられれば恋に落ちるといふ愛の神の網を強調する。若き詩人は乙女たちの外見の麗しさを愛でると同時に、生命の内なる躍動である「清きネクタルに染まった血潮」(“puro nectare tincta via”)を感取する。²⁵⁾ 生命の熱量を感じさせる詩行は情熱的な高揚感を伴っている。「茫然とする」(“stupui”: stupeō)という動詞から派生した“stupidus”が英単語“stupid”の語源で「愚かな」を意味することを考慮すれば、当該詩行は愚かにも罠に陥りかけたことの赤裸々な告白だと言えよう。

乙女への賛辞は以降84行目、最終8行を残すところまで続き、本詩全体の約4割を占める。しかし第85行以降、事態は一変する。

Ast ego, dum pueri sinit indulgentia cæci,
 Mœnia quàm subitò linquere fausta paro;
 Et vitare procul malefidæ infamia Circes
 Atria, divini Molyos usus ope. (85-88)

ですが、あの盲目の少年〔クビドー〕の気ままさが許してくれるうちに

わたくしはこの快適な城塞の町〔ロンドン〕をできるだけ急いで出て、

魔法の草モリユの力を借りて

妖婦キルケの忌まわしき住処から遠く逃れようと準備しています。

モリユは人間の本能や欲望を統御する精神力の象徴である。²⁶⁾ ここには「助力」(“ope”)を得て、情欲を克服し理想を志向する詩人の姿が認められる。

「第五エレゲイア」(*Elegia quinta*, 1629)では春になり自然が活力を回復する様子が、＜太陽＞に求愛する＜大地＞に例えて歌われる。55-78行目では太陽に呼びかけて、詩人の視点から艶やかな女性に擬人化された大地の姿が描出される。以下にその一部を引用する。

Exuit invisam Tellus rediviva senectam,
 Et cupit amplexus Phœbe subire tuos;
 Et cupit, & digna est, quid enim formosius illâ,
 Pandit ut omniferos luxuriosa sinus,
 Atque Arabum spirat messes, & ab ore venusto
 Mitia cum Paphiis fundit amoma rosis. (55-60)

＜^{テルス}大地＞は再生し、憎き老いを振り落とし、

ポイボスよ、彼女はあなたの抱擁を求めるが、
 彼女よりほかに見目麗しいものなどあろうか。

艶やかに、万物を産み出す胸を開いて

息吹は芳しきアラビアの実りとなり、優美な唇からは
 パボスの薔薇からとれる芳醇な香油を吹き出し、注いでいるというのに。

“Phœbe” (原形は“Phœbus”)は太陽および芸術を司る神ポイボスの名でもあり、詩的才能の源として詩人にも通じる存在である。ここで大地は太陽を求め、接近し、融合を望む能動的な存在として描かれる。「第一エレゲイア」で詩人が遠巻きに見ていた乙女たちとは異なり、大地自らが詩的存在を「求め」(“cupit”)ている。なお、“cupit”という語は56と57行目で繰り返し用いられ、その意味が強調される。

「この見目麗しい」(“formosius illâ”)「大地」(“Tellus”)の胸からは万物が豊富に産み出される。口からは収穫物が息吹とともに吹き出され、唇からは香油が溢れ出す。肥沃な大地の姿は「艶やかに」(“luxuriosa”)と形容される。この語は英単語“luxurious”の語源であり、「豊かな」という肯定的意味と、「節制のない」「過剰な」という否定的意味を同時に内包する。ここで詩人は大地の姿を自身に向けられたものとしては見ていない。太陽に向けられた猛烈な求愛の様子を、第三者の視点から客観的に描写しており、情熱的な場面にも関わらず詩人自身の熱量は認められない。

大地の求愛が成就されると、場面は「母〔なる大地〕の〔模範〕」(“Matres exemplum”)に続くものたちの歡樂的な宴の描写へと繋がっていく。

Sic Tellus lasciva suos suspirat amores;
Matris in exemplum cætera turba ruunt.
 Nunc etenim toto currit vagus orbe Cupido,
Languentesque fovet solis ab igne faces.
 Insonuere novis lethalia cornua nervis,
 Triste micant ferro tela corusca novo.
 Jamque vel invictam tentat superasse Dianam,
 Quæque sedet sacro Vesta pudica foco. (95-102)

このように、婀娜めく<大地>が愛を囁き、
 そばに控えていたものたちも雪崩を打って母の範に
 従う。
 というのも、今や、彷徨するクピドーは世界中を駆け
抜け、
 消えかけの松明に太陽の火で再び火を灯す。
 致死の弓弭は新しい弦を鳴り響かせ、
 新しい鋼鉄を用いた矢は不吉な輝きを放つ。
 今、彼は、かの難攻不落の〔処女神〕ディアナをも征
服しようと目論む、
 たとえ彼女が純潔のウエスタとともに、聖なる竈に
 座していようと。

ここで出現する愛の神は、宴に集うもの、愛と融合を求め
 るものたちを焚きつけるため「世界中」(“*toto orbe*”)を
 「駆け抜け」(“*currit*”)ている。彼は愛の炎を点火すべき
 者が多すぎるため、一所に留まることができず「彷徨し」
 (“*vagus*”), 使いすぎて「消えかけた」(“*languentes*”)松
 明に火を灯そうと、忙しく太陽を追いかけていく。その
 ため詩人のもとからは不在となる。詩人はその様子を遠巻
 きに眺め、愛の神が太陽に松明をかざし、その活力を補
 おうと奔走する姿を滑稽に描写する。²⁷⁾ また新調された
 弓と矢は愛の神の強力さを際立たせるが、その目標は純潔
 の守護神ディアナに定められている。「純潔のウエスタ」
 (“*Vesta pudica*”)と連帯する、「難攻不落の」(“*invictam*”)
 処女神が屈しない限り、詩人も安全である。ここに「第一
 エレゲイア」からは一歩進んだ、愛欲の神から距離を置いた
 詩人の姿が認められる。

さらに「第六エレゲイア」(*Elegia sexta*, 1629)に進むと、
 盟友ディオダティへの語り掛けを通して、若きミルトンの
 叙事詩人として「立つ」自覚と決意が表明される。まず本
 詩冒頭から54行目に至るまで、ミルトンは盟友の盛況な酒
 宴と詩歌創作の影響関係について語る。

*Massica foecundam despumant pocula venam,
 Fundis & ex ipso condita metra cado.
 Addimus his artes, fusumque per intima Phœbum
 Corda, favent uni Bacchus, Apollo, Ceres.
 Scilicet haud mirum tam dulcia carmina per te
 Numine composito tres peperisse Deos. (31-6)*

マシッコワインで満たされた杯は、詩歌の豊かな才能
 に泡立ち、
 そして、君は酒甕に蓄えられている詩行を注ぎ入れ
 るのであります。
 ここにわたくしたちは芸術と心の内より産み出される
 ポイボスを加味します。
 バッカス、アポロン、ケレスは一つであるのを好む
 のですから。
 君を通して三神が御力を合わせて甘美な詩歌を

創りだすことは何も驚くことではありません。

バッカス アポロン ケレス
 酒神、詩神、豊穡の女神は一体となりディオダティを通して
 詩歌を創り出す。ここでディオダティ自身は詩歌の才能
 を湛える「杯」(“*pocula*”), 彼の詩歌は「酒甕」(“*cado*”)
 に蓄えられた酒に例えられている。そして、盟友の宴三昧
 で享樂的な生き方は牧歌の創作に相応しいと述べている。

*Perque puellares oculos digitumque sonantem
 Irruet in totos lapsa Thalia sinus.
 Namque Elegia levis multorum cura deorum est,
 Et vocat ad numeros quemlibet illa suos;
 Liber adest elegis, Eratoque, Ceresque, Venusque,
 Et cum purpureâ matre tenellus Amor. (47-52)*

そして、乙女の瞳と音楽を紡ぎ出す指先を通じて
 「喜劇と牧歌の女神」タレイアが君の心の襞に滑り
 込むことでしょう。
 軽快な<牧歌>は数多の神々の関心の的で、
 どの神を望んでも、みなの中に招かれるのですから。
 酒神、そして〔抒情詩の女神〕エラトも、ケレスも、ウエ
 ススも、牧歌に力を与える
 薔薇色の母〔ウエヌス〕とともに、繊細な<愛>も。

酒神と豊穡の女神は酒と豊かな食事が供されることを、
 美の女神は美しい乙女が集うことを表していよう。宴を賑
 わす音楽は軽快で、その旋律は牧歌を歌うにふさわしい。
 牧歌(と喜劇)を司る女神タレイアが心の襞に滑り込むと
 は、牧歌の主題が心の琴線に触れ、詩歌の靈感を与えるこ
 との例えである。そして愛の神アモルも母ウエヌスと共に
 宴に集い「牧歌」(“*elegis*”)に力を与えるという。これは
 美しい乙女との恋愛が牧歌の創作にふさわしい主題と機会
 を与えることを表す。ここでミルトンはディオダティを牧
 歌詩人として称賛する。享樂的な暮らしこそが、愛の憂い
 と喜びの心情を思いのままに綴る抒情的な歌にふさわしい
 と認め、これを牧歌に結び付ける。

だがミルトンは本詩半ばで「しかし」(“*At*”)と言い、
 詩の流れを一転させ、盟友の些か度を越えた遊興に対する
 戒めとも解釈される詩行に進む。

*At qui bella refert, & adulto sub Jove cœlum,
 Heroasque pios, semideosque duces,
 Et nunc sancta canit superum consulta deorum,
 Nunc latrata fero regna profunda cane,
 Ille quidem parcè Samii pro more magistri
 Vivat, & innocuos præbeat herba cibos;
 Stet prope fagineo pellucida lympha catillo,
 Sobriaque è puro pocula fonte bibat.
 Additur huic scelerisque vacans, & casta juvenus,
 Et rigidi mores, & sine labe manus. (55-64)*

ですが、戦争や成熟したユピテルの治める天、
敬虔な英雄、そして半神半人の指導者について語るもの

あるときは、いと高き神々の聖なる託宣、
またあるときは、獷猛な犬〔ケルベロス〕の吠える深淵の領域を歌うもの、
そのような人物は、確実に、サモアの教師〔菜食主義者ピタゴラス〕の道に倣い、
節制して暮らし、菜や草からなる無害な食物を供するのです。
そばには澄んだ水を撫の小鉢に入れて立て、
清らかな泉から汲んだ、酔うことのない酒を飲むのです。
これに加えて、罪を犯さず貞淑に、厳格な道徳に従い、手を汚さずに青年期を過ごすのです。

ミルトンは盟友に向かって「敬虔な英雄」(“*Heroasque pios*”)の偉業を高き主題としてその謳歌を志すものは、先達の「道に倣い」(“*pro more vitat*”)「節制して」(“*parcè*”)暮らすよう説く。²⁸⁾ 汚れなき生活により作り上げられる清らかな心身に「澄んだ水」(“*pellucida lympa*”), 「清らかな泉」(“*pro fonte*”)の酔わない酒、つまり詩的靈泉から靈感を汲み入れる。²⁹⁾ それはやがて「汚れなき手」(“*sine labe manus*”)によって果たすべき、叙事詩執筆という大きな課題を意識してのことである。

詩人は靈水を「撫の小鉢」(“*fagineo catillo*”)に入れてそばに「立てる」(“*stet*”)。³⁰⁾ 野呂によれば、「堅く立つ」(英語では“*stand still*”と表す)とは旧約聖書「詩篇」中で「自然が神の命令に従順に従って、神の民を守るために盾となり、砦とな」る姿を表して用いられる。³¹⁾ さらに『楽園の喪失』においては特に誘惑に耐え、神の御前に立つアブディエル(*Abdiel*)をはじめ、神への揺るがぬ信仰を抱く「義なるもの」たちに適用されているという。ここでは靈水を湛えた撫の小鉢が詩人の傍らに「立ち」、守護のしるしとして控えている。ここに抒情詩・喜劇を歌うディオダティの持つ「酒杯」と、叙事詩・悲劇を歌うミルトンの持つ「靈水の器」という対照が鮮やかに浮かび上がる。

ここでミルトンは節度と節制ある生き方を盟友に暗に勧告すると同時に、改めて自らにその生き方を課す、その決意表明をしていると解釈される。そして、彼の決意は、将来、偉大なる務めを成し遂げるためには、「詩人自身の生き方が一篇の詩になっていなければならない……英雄的人物や名高き都市を高らかに寿ぎ歌うためには、詩人自身がそれに相応しい経験と実践を内に保持していなければならない」(*An Apology*, 1642; *CM* 3-1. 303-4) という、ミルトンに特徴的な思想へとやがては結実していくことになる。³²⁾

第三章 詩群配列と戦略：dual heroism, 内なる Satan追放, そしてキリストの誕生

第一章で明らかにされたように、「ソネット第二番」と「第三番」それぞれに認められる、“the primary female hero” (下線は論者。以下同様)と“the secondary male hero”という構図について特筆すべきことがある。それは“the primary hero”が「可憐なる乙女」であり、“the secondary hero”が恋心を清らかなる、神への愛と詩作へと昇華しようとする若き青年詩人だという点である。言い換えれば、つまり、ミルトンは男性である自分が「範例として倣う」べき英雄像として女性英雄を提示しているということである。家父長制度の権化のように言われることの多いミルトンであるが、³³⁾ 詩中では明らかに「家父長」的女性英雄が提示されている。かくて「厳格なる家父長制度の体現者ミルトン」という「偶像」は跡形もなく打ち碎かれたことになる。

次に扱うのは、ミルトンの異性に対する憧れや煩惱が、最も顕著に認められる「第七エレゲイア」の位置の問題である。『詩集』の各エレゲイアに付したミルトン自身の年代記述等に従って整理する。³⁴⁾

- 「第一エレゲイア」1626年春
- 「第二エレゲイア」1626年秋
- 「第三エレゲイア」1626年11月-12月
- 「第四エレゲイア」1627年3月頃
- 「第五エレゲイア」1629年春頃
- 「第六エレゲイア」1629年12月頃
- 「第七エレゲイア」1628年春——夏頃³⁵⁾

以上から、執筆年代順に配列すれば、「第七エレゲイア」は「第四エレゲイア」に後続する。にも関わらず、エレゲイア詩群の最終位置に置かれていることに対する疑問が従来、多くの批評家から提示されてきた。³⁶⁾ それに対する一つの回答を示す。

ミルトンが「第七エレゲイア」冒頭に明示する「19歳の作品」(“*Anno ætatis undevigesimo*”)という言葉に従えば、当該作品は七篇のエレゲイア連作中五番目となる時期に若き詩人が執筆した作品である。³⁷⁾ ミルトンの情念と異性への思いを吐露した作品として、最も官能的であり、詩人は最終的に愛欲の神に全面的に屈従する。

初心で経験不足の若き詩人は「愛欲の法」を知らなかったために、愛欲の神を軽んじ、彼の致死の弓矢を「子供だましの武器」と誤認し、少年神の逆鱗に触れ、処罰され、犠牲者となる。本ラテン語詩で愛欲の神は太陽神さえをも支配する残酷で無敵の暴君として提示される。就寝中の詩人を訪れた愛欲の神は彼を呪い、嘲笑い、信奉者という名の奴隷となると予告する。

Et miser exemplo sapuisses tutiùs, inquit,
Nunc mea quid possit dextera testis eris.

Inter & expertos vires numerabere nostras,
Et faciam vero per tua damna fidem. (27-30)

「哀れよの、そなたはもっと安全なやり方で、先例から知恵を学べたものを。

今や、そなたはわが右手の為せる業を、身をもって証しすることになろう。

そなたもわが力を思い知ったもの一人に数えられようぞ。

そして天罰を受けたそなたは、わが信奉者となるようぞ。」

予告どおり、行きずりの乙女に心奪われた詩人は煩惱と愛欲に身悶える。守護神のはずの詩女神さえ詩人を救うとはできない。詩人は、

Impetus & quò me fert juvenilis, agor.
Lumina luminibus malè providus obvia misi,
Neve oculos potui continuisse meos.
Unam forte aliis supereminuisse notabam,
Principium nostri lux erat illa mali.
Sic Venus optaret mortalibus ipsa videri,
Sic regina Deùm conspicienda fuit.

.....
Protinus insoliti subierunt corda furores,
Uror amans intùs, flammaque totus eram.
(58-64, 73-4)

わが青春の衝動が導くところに身を委ねた。
分別を欠いて、わたくしは乙女たちの視線を捉えようと視線を送り、

自らの目を制することができなかった。
偶然、わたくしは他に抜きんでた一人に目をとめた。
彼女の輝きこそが、わが災いの始まりだった。
あたかもウェヌスご自身が人間の前に姿を現わそうとしたか、

あたかも神々の女王〔ユノー〕が注目を集めるかのごときだった。

.....
するとたちまち、経験したことのない情念がわが胸を襲い、

わたくしは内なる愛に燃え、全身が燃えた。

こうして、若き詩人は不条理な幼い暴君たる愛欲の神に膝を屈して許しを請い、自ら奴隷詩人になり下がる。その天賦の詩才は暴君を寿ぐために用いられることが予想される。

Parce precor teneri cum sis Deus ales amoris,
Pugnent officio nec tua facta tuo.
Jam tuus O certè est mihi formidabilis arcus,
Nate deâ, jaculis nec minus igne potens:

Et tua fumabunt nostris altaria donis,
Solutus & in superis tu mihi summus eris. (93-8)

ご容赦ください、あなたは柔和な愛を司る有翼の神なのでありますから、

ご自身の行ないがご自身の任務と争うことのあるありませんように。

今や、おお、かの女神〔ウェヌス〕の子よ、まことに、あなたのおそろしい弓は

その矢のためにわたくしには火に劣らず強力なであります。

あなたの祭壇にはわが供物が捧げられて〔燔祭の〕煙をあげるでしょう。

あなたはわが唯一の神にして、至高なる神々のなかでも最高位の方となるのであります。

ここで詩人は常日頃、胸に抱くキリスト教叙事詩人として「立つ」という決意からはほど遠い状況に追い詰められる。異教の神である、愛欲の暴君を「至高の神々の最高位の方」として崇め奉っているからである。これでは最高の範例キリストの偉業を詠唱することは不可能である。

「第七エレゲイア」読了直後の読者は一瞬、ここにおいて、エレゲイア連作を通じて詩人が一貫して追求してきた自己節制の努力が無に帰したかのごとき印象を受けるかもしれない。詩人はこれまで一步一步たゆみなく、自己抑制と自己節制を志向し、おのが情念を理性と神への信仰の力によって制御しようと努めてきたはずであった。しかし、やはり性愛の暴君の威力の前にさしもの詩人も平伏したかと

これが杞憂に過ぎないことは、後続の「改詠詩」(“palinode”)によって判明する。³⁸⁾

Hæc ego mente olim lævâ, studioque supino
Nequitiae posui vana trophæa meæ.
Scilicet abreptum sic me malus impulit error,
Indocilisque ætas prava magistra fuit.
Donec Socraticos umbrosa Academia rivos
Præbuit, admissum dedocuitque jugum.
Protinus extinctis ex illo tempore flammis,
Cincta rigent multo pectora nostra gelu.
Unde suis frigus metuit puer ipse Sagittis,
Et Diomedéam vim timet ipse Venus. (1-10)

これら〔の詩行〕が、愚かな^{こころ}精神と不注意な熱情が打ち立てた、おのが放埒さの空虚な^{うつろ}戦勝記念碑だったならと願う。

まさに邪悪な^{あやまち}誤謬に惑わされたのだ、

鍛錬不足の若さを邪まな教師として。

だがついに蔭濃きアカデメイアがソクラテスの流れを差し出し

締め慣れたくびきを解き放つ時が来た。

たちまち、焰は跡形もなく消え去り

わが胸は氷結した。
 かの少年〔クピドー〕はおのが矢が、凍てつくのを恐れ
 愛と美の女神も、ディオメデス仕込みのわが力に怯える。³⁹⁾

「ディオメデス (Diomedes) はトロイ戦争で活躍したギリシアの英雄で、アキレウスに次ぐ勇士」である。「アテネの助けで、トロイアに味方した」美の神ウエヌス〔ヴィーナス〕に「傷を負わせた」。⁴⁰⁾ 今や、「改詠詩」を言葉の武器として放つ詩人は幼き暴君の母親さえをも克服したのである。

「これら〔の詩行〕」が指す内容に関しては、「第一エレゲイア」から「第七エレゲイア」までの全詩を指すとする解釈もあるが、⁴¹⁾ 論者は特に直前の「第七エレゲイア」のみを指していると考え。つまり、「改詠詩」は「第七エレゲイア」に加筆された詩行だと解釈する。ちなみに、HughesとDavid Massonは論者と見解を一にする。⁴²⁾

かくして「第七エレゲイア」に認められる19歳の詩人の情念と情欲は木っ端微塵に打ち砕かれたのである。特筆すべきは「改詠詩」が『1645年版詩集』出版の時点で、38歳のミルトンが新たに創作し、この位置に挿入した作品だという点である。

野呂はここで、「第七エレゲイア」と「改詠詩」を個別の二篇とする見方は採用しない。「第七エレゲイア＝改詠詩」という一篇の作品として見るべきだと考える。すると19歳の若き詩人ミルトンが抱える煩惱を、38歳の成熟した詩人ミルトンが一喝して退散させるという構図が見えてくる。つまり、19歳時点で抱えた愛欲の煩惱を、以降、ミルトンは徐々に抑制し、客体化し、親友を諫めつつ、煩惱回避を自らに課しつつ精進を続けてきた。そして「第六エレゲイア」で詩人はこのことを高らかに表明することによって、盟友の放埒ぶりを、節度を以て諫める段階に到達した。そして、ディオダティの「饗宴」を歓乐的に過ごす生き方は「抒情詩や喜劇」作者には相応しいかもしれないが、「叙事詩」を執筆叙事詩人として立つためには相応しからず、と述べている。そして自分は将来、叙事詩人として立つために、もっと清廉で節度と節制ある時の過ごし方、生き方を、という決意を表明した。このことは、第二章で金子が指摘し、分析し、証明した通りである。

そして、ついに『1645年版詩集』出版時点での創作者ミルトンは「改詠詩」を創作し、「第七エレゲイア」に後続・連結させることによって、煩惱を完全に克服した姿で提示されるのである。編集者ミルトンがそれを「第七エレゲイア」と連結し、一篇の詩として纏めた。ここに読者は、19歳の若き詩人、38歳の円熟した詩人、そして『1645年版詩集』の編纂者という、いわば「三人のミルトン」の姿を重層的に認めることになる。天才詩人ミルトンの精緻の粋を凝らした演出がなされていることが分かる。一方、作者ミルトン自身の作品配列に「倣」わずに、作品を執筆年代順に配列して読んでいった場合、「三人のミルトン」の共同

制作作品として『第七エレゲイア＝改詠詩』を見るという視点は完全に読者の視界から剥奪されることになる。

となると「第七エレゲイア」は単独に見れば1628年春から夏頃の作品であるが、『第七エレゲイア＝改詠詩』という作品の完成年は『1645年版詩集』が出版された1646年1月前後と規定される。⁴³⁾ さらに、この問題はとかく執筆年代が問題視される『闘技士サムソン』の問題とも密接に絡んでくる。これについては後述する。

さらに踏み込んで言えば、『第七エレゲイア＝改詠詩』に示された構図は『楽園の喪失』においてサタン (Satan) を論破して神のもとへ戻るアプディエル、『楽園の回復』においてサタンを論破・一喝して尖塔から墜落させる油注がれし者、イエス、さらには、牢獄にあって三人の誘惑者を論破し退けて、最終的にはペリシテ人の神殿を支える柱を倒して敵を殲滅するサムソン (Samson) の姿へと収斂していく。敵を論破し、一喝して退散させる英雄イエス・キリストおよび「キリストに倣いて」敵に打ち勝つ英雄的人物の原型がここに提示される。すなわち、煩惱を順次克服し、内なるサタンの呪縛から解放され「自由なる詩人」として「立つ」に到るミルトンの成長の軌跡が、ミルトンの配列した順にエレゲイア群を連続的に読んでいく中で、読者の前に生き生きと立ち現れるのである。

また、「第六エレゲイア」が盟友を諫めつつ、詩人自らの「清らかな生き方」を決意し表明する作品だという理解に立ったうえで、盟友に送る英詩「キリスト降誕の朝に」が誕生している事実を認識することは極めて重要である。清らなる詩人がその生き方を清らなるものとして規定した時点で、英文学史上、最も清らかな救世主誕生を寿ぐ詩歌が誕生しているからである。すなわち、盟友に送ったラテン語詩「第六エレゲイア」と英詩「キリスト降誕の朝に」は一对の、すなわち双子の詩なのである。

「第六エレゲイア」から「キリスト降誕の朝に」創作と内容に関してミルトンが詠唱する部分を以下に引用する。

Diis etenim sacer est vates, divûmque sacerdos,
 Spirat & occultum pectus, & ora Jovem.
 At tu si quid agam, scitabere (si modò saltem
 Esse putas tanti noscere siquid agam)
 Paciferum canimus cælesti semine regem,
 Fausta que sacratis sæcula pacta libris,
 Vagitumque Dei, & stabulantem paupere tecto
 Qui suprema suo cum patre regna colit.
 Stelliparumque polum, modulantesque æthere
 turmas,
 Et subitò elisos ad sua fana Deos.
 Dona quidem dedimus Christi natalibus illa,
 Illa sub auroram lux mihi prima tulit.
 Te quoque pressa manent patriis meditata cicutis,
 Tu mihi, cui recitem, iudicis instar eris. (77-90)

というのも、詩人は神々の司祭なのであります。

ですから、詩人の内奥の魂と唇はユピテルに息を吹き込み生命を与えます。

ですが、もしわたくしが何をしているか知りたいのなら、(そのことに

少しでも価値があると君が思うなら)

わたくしは、天の種子〔*cælesti semine*〕であられるがゆえに⁴⁴⁾

平和の使者たる王についてっているのであります。⁴⁵⁾

そして、かの聖なる書物において約束された祝福の時、われらが神の産声、そして貧しき馬小屋への到来。

さらに、星々の生まれ出る天空、天上で歌うものたちの集まり、

そして、突如、自らの神殿から追い出された神々について歌っています。

私はこの贈り物〔たる詩〕をキリストの生誕〔*Christi natalibus*〕に捧げます。

この詩は明け方の最初の光がわたくしにもたらしてくれたのです。

父祖の葦笛〔*patriis cicutis*〕で歌われた主題をご期待ください。

この詩を朗読するときには、君にぜひ評価してもらいたい。

友への穏和で節度ある勧告、自身が将来叙事詩人として立つために、清浄なる人生を歩む決意表明を行なうエレゲイアを起爆剤として、「小叙事詩」(epyllion)風の頌詩としての幼子イエス・キリスト、言い換えれば小イエス・キリストを主題とした詩歌が、「父祖の葦笛」(“*patriis cicutis*”)すなわち、母国語英語で誕生する。これは極めて意義深いことである。

上記ラテン語詩中で言及される英詩「キリスト降誕の朝に」の相応詩行を以下に示す。⁴⁶⁾

For so the holy Sages once did sing,
That he our deadly forfeit should release,
And with his Father work us a perpetual peace.
(5-7)
.....
Forsook the Courts of everlasting Day,
And chose with us a darksome House of mortal Clay.
(13-14)
.....
Say Heav'nly Muse, shall not thy sacred vein
Afford a Present to the Infant God? (15-16)
.....
And joyn thy voice unto the Angel Quire,
From out his secret Altar toucht with hallow'd fire.
(27-28)
.....
That the mighty Pan

Was kindly come to live with them below; (89-90)

.....
The Babe lies yet in smiling Infancy,
That on the bitter cross
Must redeem our loss;

So both himself and us to glorifie: (151-54)

むかし、明哲な聖人たちはうたった、
御子が、われらの死の天罰を解き、
われらのために、父神に永久の平安をとりなし給うと。
(序歌 第一連)

われらと住むため、久遠の天津宮居をすて去り、
われらと共に死ぬべき土塊の、暗い生身を選びたもうた。
(序歌 第二連)

言え、天の詩女神よ、汝の聖らかな詩情によって、
この幼神に、贈物を、捧げることはしないのか?
(序歌 第三連)

奥まった、聖火がふれる、御子の祭壇からの、
天使らの合唱に、まっさきに唱和させる榮譽を得よ、
(序歌 第四連)

偉大な牧神が、なさけ深くも、
地上で、彼ら〔牧夫たち〕と暮らすため、降臨とは。
(頌詩 第八連)

御子はまだ微笑むだけの、嬰兒の身で横たわる。
つらい十字架にかかって、
われらの墮落をつぐない、
自らとわれらに、栄光を与えるさだめの、その御子は。
(頌詩 第一六連)

第一九連から第二五連までは異神と邪神が追放される様が叙事詩の技法の一つである「コンカテネーション」(concatenation)の手法で描かれる。⁴⁷⁾ラテン語詩とは異なり、英詩中では「アポロン」もギリシア神話の異神として位置づけられ、予言の力を奪われ追放される。日の神ペオール、その同輩のバアル、ダゴン神、アシウトロス、リビアの日の神ハモン、生贄の神モロク、ナイルの女神イシスも兄神オルスも、主神オシリスも巨怪のツーフオンも同様に追放される。「御子は真の神性を証するため、この度し難い／輩どもを」オムツを付けたままで「征圧する」。そして、嬰兒の御子はマリアに見守られつつ眠る。

But see the Virgin blest,
Hath laid her Babe to rest. (237-38)

.....
And all about the Courtly Stable,
Bright-harnest Angels sit in order serviceable.

(243-44)

だが見よ、聖母マリアが、
御子を寝かせつけている。

……………
この厩は宮殿の如く、ぐるりには、煌らかに武装した
天使らが、奉仕の身構えで、序列をなして坐している。
(頌詩 第二七連)

最後に「キリスト降誕の朝に」に始まり、「キリスト受難（未完）」に続く四篇の詩の並び順について簡単に考察する。「キリスト降誕の朝に」、「詩篇第114篇」、「詩篇第136篇」、「キリスト受難」は『詩集』冒頭に置かれた四部作と捉えられる。最も重要なのは『詩集』がキリスト誕生ほきうたの祝歌から開始されるという事実である。このことは『詩集』全体の方向性を定める上でも、また、将来のキリスト教叙事詩人としてのミルトンの創作意図と方向性を規定するうえで、極めて重要である。

続く二篇の創作詩篇は、受肉以前のキリスト、すなわち「神の御子」が旧約聖書の中で重要な働きをしている、というミルトンに特徴的な解釈に基づいた作品となっている。⁴⁸⁾そして四作目に「キリスト受難」が位置することから、「受肉のキリストとその偉業 その1」→「受肉以前の神の御子キリストとその偉業 その1」→「受肉以前の神の御子キリスト その2」「受肉のキリストとその偉業 その2〔受難と昇天〕」という図式が浮かび上がる。すなわち、「受肉後のキリスト」の人生の最初と最後を歌った二篇の作品が「受肉以前の御子キリスト」を主題とした二篇の作品を挟み込む、というかたちが採用されているのである。このことは、後期の大作『樂園の喪失』が「受肉以前の神の御子」を“the primary hero”として描き、『樂園の回復』が「受肉後の御子イエス・キリスト」を“the Supreme Exemplary Hero”として描き出していることに繋がっていく。

それだけではない。実は『樂園の回復』と『闘技士サムソン』は別個の二つの作品として見るべきではないのである。それは、創作者ミルトン自身がこの壮大なる二篇の詩を一度に併せたかたちで出版したことが明確に証パリオード拠立パリオードてている。この二篇の詩は、「第七エレゲイア」と「改詠詩」が個別の二作品としてではなく、「完成時期は出版年1646年1月前後」である『第七エレゲイア＝パリオード』という一篇の作品として見られるべきであるとする論者野呂の主張の延長線上に位置づけられる。すなわち、壮大な二作品は『樂園の回復＝闘技士サムソン』という壮大な一篇の作品として見られるべきであると野呂は主張しておく。この悲劇風劇詩の執筆年代について、一例を挙げれば、John CaryとAlastair Fowlerは『闘技士サムソン』の執筆時期を「1647年から53年？」として「ミルトン失明のソネット」（1652年？）と「ピエモンテでおこった最近の大虐殺について」（1655）の間に配置している。⁴⁹⁾確かにミルトンはこの時期に『闘技士サムソン』の原型に近い作品

を創作していたのかもしれない。だが、この悲劇風劇詩作者はその時点でこれを出版することはなかった。彼は当該作品〔の原型〕を温め続け、満を持して『樂園の回復』と合本し、『樂園の回復＝闘技士サムソン』として1671年に出版したのである。

そしてこの合本出版作品には第一章で天海がイタリア語ソネット二篇中に認めて分析・証明した“dual heroism”の構造が極めて壮大なかたちで提示されている。すなわち「完璧な英雄」であり、“the primary hero”たるキリストがサタンを退ける「範例」としての姿と、「キリストに倣」って三人の誘惑者に論破し、最終的に「慣習と偏見」という内なる専制君主＝サタンを象徴する二本の柱を打ち倒す、“the secondary hero”，サムソンの姿という図式が壮大な展望で読者の前に提示されている。

志鷹英行は『樂園の喪失』には、“primary hero”たる神の御子（後のイエス・キリスト）と、墮落後に改悛を経て「キリストに倣いて」、雄々しく（＝英雄的に）生きようとする“secondary hero”たるアダムという、二人の主人公ヒロインが描かれていると論じ、Christopher Bondはこれを継承・発展させた。⁵⁰⁾更にこれを展開し、野呂は『樂園の喪失』にはイヴという“the secondary female hero”が存在すること、また、『ラドロー城の仮面劇』には“the primary female hero”たる「サブライナ」とサブライナの生き方に倣う、“the secondary female hero”たる「淑女」が描かれていることを明らかにした。⁵¹⁾

となると結論として、『樂園の喪失』には受肉以前の神の御子（としてのキリスト）が“the primary hero”として描かれており、更に『樂園の回復＝闘技士サムソン』においては受肉したキリストが“the primary hero”として描かれているということになる。すなわち、『樂園の喪失』と『樂園の回復＝闘技士サムソン』は神の御子／イエス・キリストの受肉前、受肉後の“the primary hero”の姿が「範例」として描かれているのである。

おわりに

以上の議論から、“dual heroism”の構造、「自己確立と内なるSatan追放」の図式、小叙事詩としての頌詩「キリスト降誕の朝に」の位置と戦略の構図などがイタリア語ソネット、ラテン語エレゲイア連作詩群、エレゲイアと頌詩の同時誕生、過去の作品と現在の作品を併せて新たな作品とする「脱構築者ミルトン」の「自由なる叙事詩人」像を確定し、⁵²⁾後の作品群に継承されていることが確認された。さらに、説得と勧告等、論述形式と方法、内容の更なる深化と拡充は、離婚論争や宗教論争、政治論争を経て、『偶像破壊者』（1649）『第一弁護論』（1651）『第二弁護論』（1654）『自己弁護論』（1655）等における論敵との議論の応酬の中で一層、精緻に練られ精製されて後の作品へと継承され、収斂していくことになる。これらの具体的検証と証明についてはこれからの課題とする。また、本論考では範囲外となった『1645年版詩集』と『1673年版詩集』

の対比・分析等も以降の論考中で扱うこととする。

註

- 1) 本研究はJSPS科研費23K00363の助成を受けている (This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number 23K00363). 文責は金子 (「はじめに」および第二章), 天海 (第一章), 野呂 (第三章および「おわりに」)。引証・参考文献は適宜脚注内に示す。
- 2) ミルトンの作品の引用は*The Works of John Milton*, vols. 1-18, edited by Frank Allen Patterson et al. (Columbia UP, 1931-38) に基づく。詩作品の引用に後続する丸括弧に行数を記す。散文作品の引用に後続する丸括弧にCM巻数と頁数を記す。なお、引用内の下線および亀甲括弧は論者による。あわせて*Complete Poems and Major Prose of John Milton*, edited by Merritt Y. Hughes (Macmillan, 1957). *The Complete Poetry of John Milton*, edited by John T. Shawcross (Anchor, 2013) Google Book Search. *The Complete Works of John Milton: The Shorter Poems*, vol. 3, edited by Barbara Kiefer Lewalski and Estell Haan (2012; repr. Oxford UP, 2014). を参照し、各版に収録のラテン語詩およびイタリア語詩の英訳を適宜参照した。各ラテン語詩の日本語訳は『ジョン・ミルトンのラテン語詩全訳集』野呂有子監訳, 金子千香訳 (金星堂, 2022). (以下『野呂・金子』), 各英詩の日本語訳は『ミルトン英詩全訳集 上』宮西光雄訳 (金星堂, 1983) (以下『宮西』) と『楽園の喪失』新井明訳 (大修館, 1978) を引用し、イタリア語ソネット「第二番」および「第三番」邦訳は野呂有子による。注作成者は寡聞にして、本論考掲載以前のこの二篇の完全版邦訳を知らない。
- 3) 1646年 (旧暦1645年) 1月, ミルトンは青年期に創作した詩作品を基に詩集を出版した。その後1673年11月, これを改訂, 増補した。それぞれを『1645年版詩集』と『1673年版詩集』と呼び、共通する要素や側面について論じる際には『詩集』と記す。以下全て同様。
- 4) 各詩作品の執筆時期について, Barbara Kiefer Lewalski, "Occasions and Circumstances," *The Complete Works of John Milton: The Shorter Poems*, by John Milton, vol. 3, edited by Barbara Kiefer Lewalski and Estell Haan (2012; repr. Oxford UP, 2014) pp. xxi-lix. および*A Variorum commentary on the poems of John Milton*, vols. 1-5, edited by Merritt Y. Hughes et al. (Columbia UP, 1970-75). に詳しい。
- 5) たとえば, 英国市民革命期に英国プロテスタントの標準版として多大な支持を集めた英語翻訳版 (*The Imitation of Christ* translated by Thomas Rogers, 1580) では秘蹟に関する第4章が削除されている。16, 17世紀における各英語翻訳についてDavid Crane, "English Translations of the *Imitatio Christi* in the Sixteenth and Seventeenth Centuries," *British Catholic History*, vol. 13, no. 2, 1957, pp. 79-100. に詳しい。
- 6) "Conversion and the Imitation of Christ in Anglican and Puritan Writing," *Journal of British Studies*, vol. 15, no. 2, 1976, pp. 21-39. に詳しい。
- 7) Perry, p. 196. さらに早い時期には, 英雄的資質や美德を総合的に備えることはきわめて稀有なことである ("contemplation and practice, wit, prudence, fortitude, and eloquence must be rarely met", *Church-government: CM* 3. 186) とも述べている。
- 8) 新井訳『楽園の喪失』(12. 561-73), 注93によれば, 当該箇所はミルトンの真のヒロイズムの告白である。
- 9) Dual Heroism は『楽園の喪失』におけるキリストとアダムの関係を考えるうえで核心的概念として志鷹英行, Christopher Bondにより解明, 提示された。野呂有子はこれを「二重の英雄の構造」と呼び, 包括し概要をまとめたうえで, 青年期の主要作品『ラドロー城の仮面劇』においても本概念が適用され得ることを明らかにした。詳細に関しては, Shitaka Hideyuki, *Milton's Idea of the Son in the Shaping of "Paradise Lost" as a Christocentric Epic*, (Eihosha, 1996), Christopher Bond, *Spenser, Milton and the Redemption of the Epic Hero* (2011; repr. U of Delaware P, 2013), 野呂有子『*The Faerie Queene*から*A Mask Presented at Ludlow Castle*へ: Dual Heroismの枠組みとthe female Heroの概念を中心として』『<楽園>の死と再生』第2巻, 野呂有子監修 (金星堂, 2017) pp. 220-54. を参照のこと。以下, 「野呂」とする。
- 10) 注9, 11を参照のこと。
- 11) Female Heroは野呂の造語である。「野呂」および, Noro Kanakubo Yuko. "From Paraphrasing 'Psalm 114' to Composing *Paradise Lost*." 『紀要研究』第91号, 日本大学文理学部人文科学研究所, 2016, pp. 19-21. を参照。
- 12) *A Variorum Commentary*. Vol. 1, p. 367. なお, 創作時期は諸説ある。
- 13) 『野呂・金子』pp. 58-62. なお, 創作時期は諸説ある。
- 14) *A Variorum Commentary*. Vol. 1, pp. 365-74.
- 15) 『母と娘の脱く失楽園——女権神授説と『フランケンシュタイン』における「対等の配偶者」——』『神, 男, そして女 ミルトンの『失楽園』を読む』(英宝社, 1997) p. 177.
- 16) Diane Kelsey McColley は *Milton's Eve* (University of Illinois Press, 1983) 中で多くの根拠を示しつつ, 『楽園の喪失』においてミルトンがイヴを徳と知性を備えた女性として描いたことを明らかにしている (pp. 79, 80, 113, 127, 140, 141, et al.). 第一に, イヴは神より託されて楽園の植物の命名権を与えられている。アダムが動物たちに名を与え, その性質を良く理解しているように, イヴは植物に名を与え, その性質を良く理解しているのである (McColley, p. 113)。旧約聖書「創世記」第二章九節に神がアダムに動物の命名権を与える記述があることから, ミルトンが『楽園の喪失』中で, これを踏襲していることは明らかである。しかし, イヴに託された, 植物の命名権については「創世記」および聖書の他の諸書にも出典箇所はなく, 完全にミルトンの独創によるものである。ミルトンはイヴをアダム同様に知性と判断力を備えた人格として描出したのである。第二に, ミルトンに先行する同時代のSerafino della Salandra, *Adamo Caduto* (1647) やGianbattista [McColley, "Index"のAndreiniの項に, Giovanni Battistaとあるのは誤記か] Andreini, *L'Adamo* (1613) に登場するイヴが, 楽園で神の恩寵を無為かつ受け身的に享受する生活を送っているのに対して, ミルトンの描くイヴは植物の育成作業に励み, 神の恩寵の業に能動的に参加している (McColley, p. 127)。ここからイヴが労働に勤しむ勤勉の徳を備えた人格として描出されていることが分かる。さらに, Noro, "From Paraphrasing 'Psalm 114' to Composing *Paradise Lost*" で指摘されるように, 墮落後の改悛はイヴから始まる。怒り狂い妻をのしるアダムに対し, イヴは心からの改悛の情を示す。ここに我々読者はイヴの謙譲の美德を認める。その上, イヴはこのアダムに対する改悛の言葉を, ダビデ王が神に捧げたミルトンの時代には見なされていた詩篇第五一篇を踏まえつつ, ダビデ王をはるかに凌駕する優れた詩のことばと内容で朗誦する (Noro, pp. 19-21)。ここから, ミルトンの手になるイヴが, 墮落後であっても知

性と教養、そして美德を備えた女性として描かれていることが明白となる。

このことについて、野呂有子『詩篇翻訳から「楽園の喪失」へ——出エジプトの主題を中心として』（富山房インターナショナル、2015）によれば、当該場面は詩篇五一篇四節のダビデ王からの神に対する悔い改めのことばを反響した「ミルトンによる創作詩篇」である（p. 92:以下、『野呂2』とする）。「女性の側から始まった人類の墮落は、その修復も女性の側から開始される。このようにイヴを描き出すことのできたミルトンは、女性の持つ肯定的な資質、美德や謙虚な心を敏感に察知し、それに対して尊敬の念を持っていたこと」、イヴがダビデ王以上の詩篇風改悔の詩のことばで許しを請う、知性と教養、美德を備えた存在であることが明らかである（*Ibid.* p. 93）。

ちなみに、わが研究チームがこれまで調査した限りにおいて、ミルトンの同時代、および先行作品中に描かれたイヴ像の中には、こうしたイヴの特性はまったく認められていない。『楽園の喪失』に先行する、あるいは同時代の類似作品の集大成として知られるWatson Kirkconnell, *The Celestial Cycle: The Theme of Paradise Lost in World Literature with Translations of the Major Analogues*, (Gordian Press, 1967) には、Avitus, *Poemata* (A. D. 507) を筆頭として、Du Bartas, *La Sepmaine* (1578), Grotius, *Adamus Exul* (1601), Andreini, *L'Adamo* (1613), Salandra, *Adamo Caduto* (1647) 等、計二四作品が収録されており、作品の英語全訳、あるいは、さわり部分の一部訳と要約等が掲載されている。わが研究チームは当該書を網羅的にチェックするとともに、必要と判断された場合は原書にもあたった。例えば、*Adamo Caduto*に関してはInternet Archives搭載の原書の、特にイヴの台詞に焦点をあてて検討を行なった。また、*Adamus Exul*に関しては、越智文雄著訳『Hugo Grotius: *Adamus Exul* (1601) —「楽園を追われたアダム」—John Milton: *Paradise Lost* (1671) の1つの原型として』（明文舎印刷株式会社、1998）にあたりなどして、遺漏無きようところがけたことを付記しておく。

- 17) Shawcross, p. 153.
- 18) *Paradise Lost*, 4. 298; 5. 15; 8. 43, 488, 600; 9. 459.
- 19) Noro, p. 18. 本稿第三章で扱われる頌詩「キリスト降誕の朝に」中でもキリストは「偉大なる牧神」と表現される。
- 20) 「既にあなたは煌めく天上の人となり、栄光の中で、身の上ばなしがあなたとそっくりの、あの美しいシリアの女羊飼ラケルと、隣合わせに坐している」（『宮西』p. 111）。
- 21) 羊飼いの父親の羊に水を飲ませようとしているところをモーセに助けられた（Exod. 2. 16）
- 22) 庭の世話をするアダムとイヴの姿は『楽園の喪失』における特異性の一つである（McColley, p. 127）。
- 23) 新井明『ミルトンの世界 叙事詩性の軌跡』（研究社、1980）p. 29.
- 24) 以下、ラテン語邦訳は全て『野呂・金子』に拠るが、本論執筆に際して少々訳を変えた場合もある。
- 25) “puro nectare tincta via” は「天の川」（the Milky Way）を意味して用いられる（*A Variorum Commentary*. Vol. 1, p. 54.）。ここでは象牙の腕にはない、生きた人間の中に流れるものとして「血潮」と意識した。
- 26) 『モリュ』『ギリシア・ローマ神話大事典』ジャン＝クロード・ベルフィオール著、金光仁三郎監訳（大修館書店、2020）
- 27) 小さな武器でポイボスに勝利したクビドー（オウイディウス『変身物語』第一巻）と比較すれば、本場面の滑稽さは明らかである。またミルトンは当該逸話を題材に「第七エレゲイア」を創作した。
- 28) なおここで挙げられる「戦争」「天」「地獄」「英雄」「半神半人の指導者」「託宣」は一般に、歴史的事件、英雄の事跡、神話などを題材にする叙事詩にふさわしい主題である。
- 29) 詩的霊泉については、「第四エレゲイア」31-2行、「第五エレゲイア」9-10行、「父にあてて」1-2行を併せて照されたい。
- 30) ヨーロッパバナはその学名を“*Fagus sylvatica*”といい、種小名“*sylvatica*”は「森の」を意味する。『詩集』ラテン語詩部門の第二セクション名“*sylvarum liber*”に用いられている通り、同時に「詩群」を意味する語である。
- 31) 『野呂2』pp. 66-8, 83-4, 276-9を参照。
- 32) 野呂は『教会統治の理由』を引いて、ミルトンにとって詩人の役割とは範例の実例を通して聖と徳を教えることであつたと述べている（『野呂2』pp. 36-7）。またJohn Spencer Hillは著書 *John Milton, Poet, Priest and Prophet: a study of divine vocation in Milton's poetry and prose* (Macmillan Press, 1979) でミルトンの初期の詩作品に顕著な特徴として「準備不足への抗議」（“its reiterated protestation of unpreparedness”; p. 62）を挙げている。これは宗教詩人としての使命を果たすには準備と成長が必要であると考え、その過程で得た自らの経験に基づき「教訓的かつ模範的な」（“doctrinal and exemplary”; *Ibid.* p. 75）作品を創作しようとの思いから生じている。ミルトンは自らの生き方や経験を詩に反映させることを重視し、主題にふさわしい経験を積み、自ら範例を示せるように準備をしている。このような創作姿勢が、詩人自身の生き方が一篇の詩になるようにという考え方を形成しているといえる。
- 33) Sandra M. Gilbert and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination* (1979; repr. Yale UP, 2000) p. 188; 野呂「<楽園喪失>から<楽園脱出>へ——女権神授説とウルストンクラフト＝シェリー母娘の共同戦略」『もっと知りたい名作の世界⑦ フランケンシュタイン』久守和子、中川僚子編（ミネルヴァ書房、2006）pp. 76-92.
- 34) 『野呂・金子』pp. 31-58.
- 35) 上掲書 p. 58.
- 36) 例えばHughesは、Parkerの示唆を踏まえて、1630年とすべきところを印刷所が間違えて印刷したのではないかと述べている（58）。
- 37) 執筆時期には諸説あるが、われわれの作品分析・解釈方法は、一貫して、作者にして編集者たるミルトンの言説と配列方式に従うものであることをここで再度確認しておく。
- 38) 「改詠詩」とは、前に書いた詩の内容を取り消す詩である。
- 39) 『野呂・金子』p. 62.
- 40) ホメロス『イリアス』第5巻334-46行を参照。
- 41) *A Variorum Commentary*. Vol. 1, p. 129.
- 42) John Milton. *Paradise Regained, The Minor Poems, and Samson Agonistes: Complete and Arranged Chronologically*, edited by Merritt Y. Hughes (Odyssey Press, 1937) p. 102. なお、注30で示したように、20年後にHughesはこの点に関してかなり曖昧なコメントを残している（58）。執筆年とミルトンの当該詩に関する見解に関しては、*A Variorum Commentary*. Vol. 1, pp. 127-29に詳しいが、説明文中でL. L. Martzが論者野呂と同見解であることが示されている。
- 43) 出版年表記に関しては注4を参照されたい。
- 44) ここで「天の種子」とは神の御子キリストを指す。なお、“seed”の語がミルトン作品群で果たす極めて重要な役割に関しては『野呂2』pp. 57-62他を参照されたい。

- 45) 「81行目から終わりにかけては『キリスト降誕の朝に』創作について述べている。ミルトンは本作品に『キリスト降誕の朝に』を同封しディオダティに送ったとされている」と注記がある（『野呂・金子』 p. 57）。
- 46) 『宮西』 pp. 66-84.
- 47) "Concatenation." Def. 2. *The Oxford English Dictionary* (1933: repr. Oxford UP, 1961). 用例に "1678 Norris Misc. (1699) 372 Those Dispensations, which separately taken, appear harsh, . . . in concatenation. . . conspire to the Beauty and Interest of the whole." とある。同種類の品目や事件、事物等を博物誌学的に羅列し、連鎖させて詠唱する手法を指す。かつて新井明は『楽園の喪失』（10. 507-47）に関して此処は蛇づくし、蛇のイメージを百科事典的に列挙・展開した concatenation の最も効果的な実例になっている、と授業で述べた。あわせて新井訳『楽園の喪失』（1. 381-521）、注33を参照のこと。
- 48) 『野呂2』 pp. 49-69, 70-96.
- 49) John Milton, *The Poems of John Milton*, edited by John Cary and Alastair Fowler (Longmans, 1968) p. 330.
- 50) Shitaka, pp. 130-31, 151.; Bond, p. xiii.
- 51) サブライナの造形と表象がイエス・キリストに近似していることから、彼女が女性版イエス・キリストとして描出されていることを明らかにした（『野呂』 pp. 248-53）。
- 52) ここでいう「脱構築者」とは、文学の伝統的な枠組みや定型を熟知、修得し、それを基盤として新たな作品の構造や手法を創造しようとする作家を指している。「ダモンの墓碑銘」にみられる「脱牧歌詩」（"de-pastoralization"）の手法がその一例である。詳細は、野呂「脱＜牧歌詩＞の原理——*Epitapium Damonis*から逆照射するPastoral Convention」『ジョン・ミルトンのラテン語詩全訳集』（金星堂, 2022） pp. 165-84. を参照されたい。

日本大学工学部紀要

第 65 卷第 2 号

令和 6 年 3 月 21 日 印刷

令和 6 年 3 月 25 日 発行

非 売 品

編集兼
発行者

日本大学工学部工学研究所

〒963-8642 福島県郡山市田村町徳定字中河原 1

Tel. (024) 956-8648

〈e-mail address〉 ceb.kenkyu@nihon-u.ac.jp

印刷者

共栄印刷株式会社

〒963-0724 福島県郡山市田村町上行合字西川原7-5

Tel. (024) 943-0001(代)



JOURNAL OF THE COLLEGE OF ENGINEERING
NIHON UNIVERSITY

Vol. LXV, No. 2, 2024

CONTENTS

GENERAL STUDIES

The effect of teachers' stress on corporal punishment:

Focusing on the existence of "tight" tendency by model building.

..... Koichi SAITO and Tomoki YAMADA (1)

Milton's Concept of *Imitatio Christi*: From *Poems* 1645 to *Poems* 1673 (Part 1)

..... Yuko Kanakubo NORO , Chika KANEKO and Kina AMAGAI (7)